

ひとのちから

CLOSE UP



荒尾市オリーブ研究会会長

廣川昭敏さん

ひろかわ・あきとし 昭和23年生まれ、高浜在住。若い頃は軟式テニスで国体に出場、決勝まで進んだことがあるそう。今は仕事一筋。「植物の生育に合わせて自分が手伝いをするだけです」

平成22年から始まった荒尾のオリーブ栽培は、荒尾市オリーブ研究会が中心になって取り組んでいます。研究会の会長を務める廣川さんは、ミカンを作って40年のベテラン。そんな廣川さんがオリーブの栽培に取り組んだのは、ミカンの木の一部を植え替えるかミカン畑を縮小するか迷っていたとき、市役所でオリーブを奨励していることを知ったからです。

国産オリーブといえば香川県小豆島が有名です。荒尾でも採れるものなのか廣川さんも半信半疑でしたが、「新しい作物に挑戦してみた」という気持ちが強かったんです」と笑います。オリーブ栽培は手間がかからず、病害虫が少ないことも魅力だったそうです。

「2年目に花が咲いたんですが、実はならなかったんです」もしかしたら実はできないのでは…そんな不安を抱えながら迎えた栽培3年目となる昨年10月、荒尾のオリーブは、見事に実を

付けました。廣川さんの農園からはおよそ40キロが採れ、市全体では150キロほどが収穫できました。

「とにかくうれしかった」と廣川さん。特にオリーブオイルとオリーブの新漬けなどの製品が完成した喜びは、作った人にしか分からない、と目を細めます。

更に専門機関の分析で、荒尾産オリーブオイルはとても質が良いことが分かり、将来の特産品としての期待が一気に膨らみました。

「荒尾の風土は、まろやかで良質なオリーブオイルを生み出します。これを荒尾のブランドとして確立したいですね」廣川さんは生き生きと語り、栽培農家をもっと増やして生産量を安定させたいと言います。また、庭木や街路樹などにするなど、市ぐるみで取り組むオリーブによるまちづくりができないかと考えています。「荒尾オリーブ」が名実ともに全国にその名を響かせる日に向けて―挑戦は今、始まったばかりです。